



Title	定時制高校で学ぶ外国ルーツ生徒への支援に関する一考察
Author(s)	大川, ヘナン
Citation	教育文化学年報. 2022, 17, p. 25-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87536
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

定時制高校で学ぶ外国ルーツ生徒への支援に関する一考察

大川 ヘナン

1. はじめに

1990 年の出入国管理及び難民認定法（以下、入管法）の改正以降、数多くの外国人が来日を果たし、そして、彼らの家族として外国ルーツの子どもや若者が日本の学校に入学することになる。教育社会学の領域では外国ルーツの若者たちの学校における適応（太田 2000）やアイデンティティ（清水 2006）に関する研究が蓄積する一方で、若者たちの高校進学（志水 2008）や職業移行（児島 2010）にも目を向けられるようになる。近年ではさらに若者たちの大学進学といった教育達成にも研究の関心が広がることになる（樋口・稲場 2018）。しかし、研究領域が広がる一方で定時制に通う外国ルーツの若者たちの実態については依然として研究蓄積が限定的である。1990 年当初では外国ルーツの若者たちの高校進学が一つの課題とされており、比較的進学が容易な定時制高校にある一定の外国ルーツの若者たちが通うことになったことは自明の事実であるが、これらの定時制高校における外国ルーツの若者たちに関する研究は日の目を見ることは少ない。そこで本稿では定時制に通う外国ルーツの若者たちの実態をフィールドワークから探り、定時制高校における外国ルーツの若者たちに対する支援のあり方について検討を行う。

2. 問題意識

戦後の日本学校教育において、定時制高校はいわば勤労学生の学びを保障する場として誕生した。勤労学生とは働きながら学校で学ぶ学生であり、戦後の混乱期において、経済的な理由によって学校に通うことができなかった人々の学びを保障する目的で生まれることになる。定時制高校の前身にあるのがエリート教育の系譜を持つ中等学校の夜間過程と非エリート教育の系譜を持つ青年学校である。その為、定時制高校は二つの系譜を一本化させることになる（佐川 2022）。しかし、その背景には青年期教育におけるエリートと非エリートの分断を克服する思惑もあり、制度計画の段階において教育水準を全日制と同等のものとするのが考えられていた（濱沖 2020）。

高校進学率が低かった 1950 年代において定時制高校は勤労学生の為の学び場としての機能を果たしていたが、1960 年代を契機に全日制高校への進学率が高まることとなる。そ

して、1970年代に入ると高校進学率も90%を超え、「高卒当然社会」（香川他 2014）と表現されるようになる。全日制への進学が一般化する中において、定時制高校は「勤労学生の学び場」から、「多様な困難を抱える学生の学び直しの場」へと変容した（古賀 2017）。

上記のように定時制高校はその時々時代の背景に即した形で、全日制高校ではカバーし切れない学生を包摂してきたが、1990年の入管法改正以降もニューマカー青年の進学保障の場ともなってきた（宮島 2019）。外国人生徒の全国的な調査がない現状であるが、いくつかの調査からその実態が窺える。文部科学省（2018）の調査では外国人生徒ではなく、「日本語指導が必要な児童生徒」という基準で実施した調査では日本語指導が必要な生徒の総数が4,172人⁽¹⁾である中、定時制高校に進学している生徒は2,341人と約半数の生徒が定時制高校へと通っている結果が示された。しかし、神奈川県で実施された調査を見ると、外国ルーツの若者が必ずしも積極的に定時制高校を選択している訳ではないことが伺い知ることができる（神奈川県教育委員会他 2021）。神奈川県では197人の日本語指導が必要な生徒に進学先を調べたところ、在県枠⁽²⁾がある神奈川県では生徒はその在県枠を活用して全日制への進学を遂げていることがわかる。在県枠での115人の生徒のうち、定時制高校へ進学が10%程度であるのに対して、一般枠での進学では比率は逆転して、82%の生徒が定時制高校へと進学していることがわかった。また田巻（2020）の栃木県での調査では日本語指導が必要な生徒の25%が定時制高校へと進学している一方で、日本語指導が必要でない生徒たちの3%のみが定時制高校へと進学していることが明らかとなった。つまり、可能であれば全日制への進学を希望しているが、入試等の困難によって定時制を選択していることがわかる。このように定時制高校は日本語に困難を抱える外国ルーツの若者たちへの進路保障の場として機能していることが窺える。

このように定時制高校は外国ルーツの若者の進学先として重要な場として機能してきたことは自明のことであるが、これまので外国ルーツの若者の研究において、定時制高校が着目されることは少ない。外国ルーツの若者の高校における研究では若者たちが教育困難校に組み込まれることでアスピレーションが冷却される問題（広崎 2007）や特別措置を実施している高校における包摂の取り組み（志水 2008）が取り上げられてきた。志水の研究（2008）では定時制高校に通う外国ルーツの若者たちにも触れられ（今井・大坪 2008）、「学校に通う意義」が外国ルーツの若者を定時制高校に繋ぎ止めている状況が報告された。しかし、このような定時制高校における外国ルーツの若者の教育社会学的な研究は限られており、日本語指導（高松 2013）や授業実践（黒田 2021）または体制づくり（野部 2020）などの実践に関わる研究が多く散見される。その為、外国ルーツの若者が定時制高校でどのような現実に向き合っているのかに触れた研究は見当たらない。

そこで定時制高校に関する研究に目を向けると、学校文化（鍛冶 2018）、アイデンティティ（城所・酒井 2006）、中退（古賀 2017）と多岐に渡る視点に目が向けられており、さらに定時制高校に求められる支援が変化する中で、教師たちがどのようにその包摂のロジックを変容させていったのかが議論されてきた（佐川 2022）。しかし、定時制高校で学ぶ

外国ルーツの若者が抱える困難や支援を実施する教員に目が向けられていることは依然としてない。そこで本稿では定時制高校で学ぶ外国ルーツの若者の現状を明確に位置付けるために、フィールドワークを通じて彼らがどのような形で包摂をされており、そして、一方ではどのような困難を抱えているのかを明らかにし、定時制高校の果たしている役割について論じていきたい。

3. 調査概要

本稿で 2021 年 7 月から 2022 年 2 月までに A 定時制高校（以下、A 高校）で実施されたフィールドワークのデータを使用する。A 高校は関西地方の X 県 Y 市に位置している。A 高校は大正初期に設立されている男女共学の高校であり、現在は全日制と定時制の両方の課程を有している高校である。X 県には 15 校の定時制高校があり、Y 市が最も多い 5 校の定時制高校を有している。A 高校の生徒数は 2022 年現在で 60 名程度であり、年々定時制の生徒が減っていることが課題となっている。そして、現在は 10 名の外国ルーツの生徒を有している。在日韓国・朝鮮籍の生徒は古くから在籍してきたが、2008 年頃から日本語指導が必要な生徒が入学をするようになり、2011 年頃から必要に応じて抽出授業を行い始めた。そして、2019 年には正式に日本語の授業をカリキュラムとして採用することになる。現在 A 高校では日本語の授業以外では外国ルーツ生徒のサークルを作ったり、学習会を設けたりと生徒に寄り添った支援を実施している。

筆者は週 1 回、0 時間目と称して学習会を実施しており、学習会の後にフィールドワークを実施している。学習会には 10 名の外国ルーツ生徒が参加している訳ではなく、4 名の中国ルーツの生徒のみが参加している。他の生徒たちに関しては外国ルーツということオープンにしたいくないことや、「日本語で困っていることはない」といった理由から参加をしておらず、筆者も対面したことがない。4 名の学生の参加はバラバラであり、それぞれのタイミングで学習会に参加をしている形になっている。学習会では受験勉強や日本語能力試験の勉強、または日本語での会話の練習の場として、雑談をするといった、それぞれの生徒の要望に答えた形で学習会を実施している。本稿では主にそれら 4 名の外国ルーツの生徒たちの学習会や授業の様子から定時制高校における彼らの現状を描いていく。

調査に際にして A 高校には調査協力を得ており、職員室内では筆者らが授業見学を行うことを周知してもらっている。また授業見学に関しても外国ルーツの生徒に授業見学を行なってもいいかの許可を取った上で授業見学をさせてもらっている。本稿に登場する 4 名の外国ルーツの生徒たちの概要は表 1 である。また本稿で使用する名前は全て仮名である。

表 1 外国ルーツ生徒のプロフィール

No.	名前	性別	年齢	学年	来日時期	ルーツ	希望進路
1	ヤン	男	19	4年	8歳	中国	就職
2	リー	女	19	4年	9歳	中国	専門学校
3	ファン	男	19	3年	13歳	中国	大学
4	チェン	男	17	1年	15歳	中国	進学 ⁽³⁾

本稿に登場する 4 名の生徒に関しても触れて起きたい。4 名とも中国出身であり、中学校は日本の公立学校を卒業している。しかし、様々な原因で中学校に通っていない時期を持っている。チェンさん以外の 3 名は中国語と日本語のバイリンガルである。4 名とも家族と暮らしており、両親は日本語が堪能ではない為、家族の言語的なサポートを生徒たちが行なっている。ヤンさん以外は進学を希望している状況にあるが、本稿執筆段階（2022 年 2 月現在）の時点で、ヤンさんとリーさんは進路が未定の状況であり、ファンさんは夜間制大学へ進学、そして、チェンさんは退学をしてしまっている現状にある。

4. 外国ルーツ生徒に対する包摂と限界

本節では外国ルーツ生徒たちが定時制高校においてどのような現状を生きているのかを描き出していく。彼らの現状と高校における包摂とその限界を理解する為に、本節では高校における外国ルーツ生徒たちに対する包摂の取り組みと、包摂を取り組みながらも限界点についても触れていきたい。佐川（2022）は定時制高校における教員は変化する学生のニーズに対応する形で「包摂のロジック」をその都度を組み替えていることが論じられた。本稿でも同様にこの「包摂のロジック」が定時制高校に通う外国ルーツ生徒たちにも適応されていることが想定できる。しかし、一方で現状の制度やリソースでは対応しきれない側面もあり、本節ではその 2 点について論じていきたい。

1) 多様な困難と共に包摂される外国ルーツの生徒たち

先行研究でも論じられているように定時制高校には多様な困難を抱えた生徒が通っている現実がある。日本人生徒の中にも中学校から人間関係の構築に課題を感じている者がおり、その為支援の対象となるのは外国人生徒だけでない現状がある。さらに前述のように日本語に困難を抱える外国ルーツ生徒が定時制高校を選択する現状において、定時制高校にはコミュニケーションに困難を抱える日本人生徒も通っており、教員は必ずしも外国ルーツ生徒たちを対象とした特別な支援を実施しなくても、包摂される形になる。

「中学校通えていなかった子だと体育は苦手じゃないですか？」と質問すると、「1 年の時はそうですね。学校に行けなかった。外に出れなかった。生活が昼夜逆転している子もいるので、スポーツを全くやってなかった。ルールを全く知らないという子がいますね。このクラスは 3 年なので、もう大丈夫ですけど、1 年のときは結構静かですね。」と A 先生が教えてくれた。…「以前フィリピンの子がいましたが、バレーはうまかったですね。ただルールを教える時に

困ることはありますね。どうしても言語が影響しますね。ただ日本人の子もルールを知らない子もたくさんいますので、一緒に丁寧に説明しますね。」と。生徒の方を見るとB先生がバットの持ち方やバットの振り方の説明をしていた。また野球の前にキックベースを授業でやっていたようで「キックベースでは…」という感じでキックベースで学んだことを活用しながら説明をしていた。

(2021 年 10 月 14 日の体育の授業の FN より)

上記の体育の授業ではファンさんは初めて「野球」というスポーツに触れていた。その為、ファンさんは野球のルーツはもちろん、さらにバットもはじめて持つこととなる。しかし、それは外国人であるファンさんだけの経験ではなく、日本人生徒の中にも同様の「スポーツを知らない」という生徒もいる状況にある。その為、教員は生徒がスポーツを知らない前提での説明を行い、さらにより理解を促す為に、野球を実施する前にキックベースといったルールが近いスポーツを織り交ぜることで、理解をわかりやすくする工夫を行なっている。

そして、定時制高校において教員から包摂の取り組みがある一方で、日本人の同級生からも外国ルーツ生徒を仲間として受け入れる姿勢がある。それは外国ルーツ生徒だけでなく、日本人生徒も様々な困難を抱えていることから、「できない」「わからない」ということに対して、声掛けをしたり、気を配る側面がある。

ファンさんは前回、ボールを投げることもおぼつかなかったが今回は投げることも打つことも上達していた。授業では二チームに分れて試合をしていたが、ピッチャーは基本的に下手投げで打ちやすい形でボールが投げていた。そして、ボールが打ちづらいと敵味方関係なく、「もうちょっと高く投げたれ！」や「もっと右やないと打てへんで」と声を掛け合っていた。試合をするというよりも一緒に楽しむという様子だった。野球が上手な子もあり、教頭先生は「このクラスは昼から来ている子が多いからな」ということだった。

(2021 年 11 月 25 日の体育の授業の FN より)

外国ルーツ児童生徒の支援において、日本の学校には「特別扱いしない学校文化」というものが存在しており、それが外国ルーツの若者たちの支援を阻害していると指摘をされている(志水 2000)。しかし、それらの「特別扱い」は特別枠校といった積極的に外国ルーツ生徒の支援を実施する場では形成され、機能していることも明らかにされている(伊藤他 2019)。定時制高校においてもこの「特別扱い」をすることが許容されていることが見て取れる。その理由は「特別扱い」を受けるのは外国ルーツ生徒だけでなく、日本人の生徒も同様に教員より特別な支援を必要とすることがあるからである。

先生は生徒たちに取り掛かるように指示をしたので、様子を見て回った。チェンさんはすでに最初の設問を終わらせていた。「大丈夫？簡単？」と声をかけると頷いて返事してくれた。そこで他の生徒のところに回った。後ろの方に座っている男子生徒が問題につまづいているようで止まっていた。そこでその生徒のヘルプに入った。内容は日本語文があり、穴埋め形して is, are, was, were と not を入れるというものだった。私がその生徒をヘルプしている間にC先生は他につまづいている生徒の支援をしていた。

(2021 年 12 月 2 日の英語の授業の FN より)

定時制高校における支援の対象は外国ルーツ生徒だけでなく、日本人生徒も学力やコミュニケーションの面において支援を必要としている。その為、授業中に特別な支援は必ずしも外国ルーツ生徒だけに向けられたものではなく、すべての生徒が支援の対象としてあり得る。そのような雰囲気が生徒同士の声掛けや許容としても表れており、教員の支援も滞りなく、行き渡ることが可能となる。

このように定時制高校における学校全体において困難を抱える生徒が国籍に関係なく存在することによって「特別扱い」を可能にしているが、これらの支援にもある一定の限界がある。そこで次節ではその限界にも触れていく。

2) 多様過ぎる生徒に対する限界

前節では定時制高校において多様な困難を抱えている生徒がいることで、外国ルーツ生徒も支援等が受けやすいという状況を見ることができた。しかし、これらの支援も必ずしも十分とは言えない現実も存在する。その背景には生徒数が減っていることによって利用できるリソースが減っていることや、支援員が集まらないことも影響をしている。前節でも論じたように多くの生徒が多様な課題を抱えているということは、翻れば対応する生徒も課題も多く、現状の教員だけではカバーしきれないという現実もある。

特に外国ルーツ生徒の特有のニーズは言語的な支援であることもあり、それを通常の授業で組み込むことは大きな挑戦である。教員も言語的な支援のニーズに対して理解をしているが、外国ルーツ生徒は日本人の中ではやはりマイノリティになってしまう現状がある。

英語の授業が終わった後にC先生に挨拶をして、「チェンさんは日本語が難しいみたいです」と声をかけると、「そうですね。問題もあまり日本語を必要しないものを作っていますけど、どうしても日本人の生徒もいるのでね。テストは日本語訳は出さないようにしています。」とチェンさんにも気を使っているようだった。また「彼にとっては簡単みたいですよね。中国の英語の授業の方が難しかったって言ってました。」とチェンさんの英語のレベルが授業のレベルと合っていないことを認識しているようだった。ただ全体のレベルや日本語のところで、どうしてもバランスが難しいようだった。

(2021年11月18日の英語の授業のFNより)

英語の授業において多くの日本人が生徒が中学校に通えていなかったという経験もあり、授業のレベルはかなり優しくめに設定をされている。さらに授業中にはC教員は丁寧に一人ずつ内容を理解しているかどうかを見て回っている。A高校では英語の授業は「外国語」として位置づいており、英語の他にも韓国語も選択できる為に、クラスは5名ほどの少人数になっている。それらも功を奏して、一人一人に対して細かい気配りが可能であるが、一方で言語的な支援までは行き届かない現実もある。筆者が授業見学に入った際にはC教員がプリントを出した際には筆者がチェンさんの隣でサポートすることになる。その際にチェンさんは英単語の内容はほぼ理解できる一方で、日本語訳になるとわからないという様子だった。C教員はそのことを把握した上でテストには日本語訳を問題として出さないよう

にしているが、日々の授業ではその対応までできない現実がある。

言語的な支援が難しい現実において、日本語の授業が外国ルーツ生徒たちにとっての日本語を学ぶ重要な場となっている。日本語の授業では主に日本語能力試験をベースに授業が進められることになるが、日々の生活において日本語で支援を必要となる場合も外国ルーツ生徒は日本語の授業が助けを求める場となる。

リーさんはこの日本語の授業で自動車免許試験の内容をやりたいとのことだった。教習場の問題集を持っており、「これやりたい」とD先生に渡していた。また専門学校の問題集も一緒に渡して、D先生が「コピー取って、明日返すな」と言っていた。

(2021年9月16日の日本語の授業のFNより)

リーさんは日本語能力は高く、日頃の会話では卒なく日本語を使いこなしている様子であったが、自動車免許といったことや、進学を希望している専門学校の過去問に挑戦するには支援が必要である。D教員もまたそのニーズを理解しながら、その内容を授業に取り組んでいる。しかし、D教員は非常勤講師の為、支援できる時間は限られている。そして、日本語の授業はリーさんだけでなく、ヤンさんも一緒に受けていることもあり、リーさんのみにオーダーメイドされた授業を展開することも難しい。その為、D教員は授業外の時間でボランティアのような形でリーさんを支援することが求められえることになる。

リーさんが運転免許等試験に支援を求める一方で、ヤンさんは会話によりニーズを感じる。リーさんと比較するとヤンさんは日本語がおぼつかない点もある。日常会話には十分な日本語能力であるが、就職を希望しているヤンさんは自身の日本語能力に自信を持つことができずにいる。筆者と行っている学習会でヤンさんは「日本語能力試験ではなく、会話の練習をしたい」と申し出た。その理由は日頃日本人と会話をする機会が少ないヤンさんはよりスムーズに会話をしたいからである。筆者はその申し入れを受け入れて学習会では雑談のような形で会話の練習をすることになった。ここにもう一つの定時制高校における困難が見える。前節では多様な困難を抱える生徒が許容し合う様子を描き出したが、許容し合っても必ずしも友人関係が結ばれるわけではないのである。定時制高校では生徒の数も少なく、さらに授業が終わるのが夜の遅い時間になるために、日本語に自信を持ってないヤンさんは友人を作るのに苦戦を感じることになる。そして、日々の生活において学校以外で日本語を使う場面のないヤンさんにとっては自然な日本語を学ぶ場がない状況となっている。

これまで論じてきたように定時制高校において多様な生徒がいることによって、教員も支援を実施しやすい雰囲気の後押しされ、外国ルーツ生徒に限らず、「特別扱い」を行いやすい状況になっているが、一方で学校的な支援のリソースが全体的に不足していることによって外国ルーツ生徒が必要としている支援が必ずしも十全に行き渡っているとは限らない現実もある。そこで次節これらの現状を踏まえた上での考察を行っていく。

5. 考察

本稿では定時制高校に通う外国ルーツ生徒たちがどのような状況で学校生活を過ごしており、その中で教員の包摂の取り組みとその限界についてフィールドワーク調査から描き出した。本稿の調査により見えてきた点は以下の2点にまとめることができる。

一つは定時制高校における包摂の試みはその学校的特性によって比較的容易に支援が実施しやすい土壌にあるといえる。先行研究でも論じられているように定時制高校では中学校で不登校であった生徒や全日制で問題を抱えて定時制へと転校をしてきた生徒が多く存在する。そのような生徒層を抱える定時制高校において、国籍に限らず様々な問題を抱えている生徒がいる。それぞれの生徒が多様な問題を抱えていることを教員はもちろん事前に理解しており、そして、生徒同士も同様に他のクラスメイトにも事情があることを十分に理解している。その為、通常全日制の高校では特別扱いされ、最良となるような特別な声かけや、授業中の支援は定時制高校では当然のように受け入れられることとなる。そのような前提がある中において「できない」「わからない」ということは特別なことではなく、教員は理解の上での指導となり、さらに生徒同士も共通認識を持っていることになる。このように定時制高校であるが故に、外国ルーツ生徒特有の問題も際立つことはなく、日本人生徒と同様の立場で支援を受け入れることが可能となる。

定時制高校では多様な生徒が多様な問題を抱えていることが外国ルーツ生徒に対しても同様に特別扱いにならない支援が行き届く土壌となっている。だけれども生徒の多様な問題を少ない教員数でカバーしなければならない問題もあり、外国ルーツ生徒が抱えている問題を認識していたとしても、対応しきれない場面も多い。特に日本語に関する問題は大きく、少人数での授業を実施していたとしても多くの生徒が学力面やコミュニケーションの面で課題を抱えている場合には外国ルーツ生徒の日本語までをケアするのは難しい。また夜間学校という特性もあり、外国ルーツ生徒は他の日本人生徒と交流を持つことが難しい。その為、友人との交流を通じての日本語の上達も難しくなり、日本語上達しないことによってさらに日本人生徒との交流を持つことに対して自信をなくしていくという負の連鎖が発生してしまっている状況がある。

これらのことを踏まえると、定時制高校には外国ルーツ生徒を包摂しやすい土壌がある一方で、課題を抱えている生徒が数多くいることで外国ルーツ生徒特有の問題に対して適切な対応ができないという側面を持っているといえる。田巻（2020）の調査で示されているように、日本語に特段の問題を抱えていない外国ルーツ生徒は全日制高校を進学先として選ぶ傾向があり、日本語に課題があるからこそ定時制高校を選択している、もしくは定時制高校以外の選択肢を持たずにいる可能性が高い。このような日本語に課題を抱えている外国ルーツ生徒の多くは小中学校に来日をしていたとしても、公立学校では適切な支援を受けることができずにその不利が年月と共に積み重なっているケースが多く存在する。実際に本稿に登場する外国ルーツの若者たちもそれらのケースに該当すると考えることがで

きる。その為、外国ルーツの若者の抱えている課題は小中学校時の適切な受け入れと支援が行われていたら、そもそも発生しなかった問題である。そう考えるとやはり義務教育段階における「教育を受ける権利」と「日本語を学ぶ機会」が保障されていなかったことが問題の根っこにあったのではないかと推測することができる。

定時制高校には確かに外国ルーツの若者たちを受け入れ、支援をしていく土壌が整っている。しかし、外国ルーツの若者たちの抱えている問題は必ずしも定時制高校で生まれた問題ではなく、それより先の義務教育段階で発生した問題であり、それらの問題をリソースが限られている定時制高校に解決を任せるのではなく、早い段階の義務教育内での適切な対応が求められている。

〈注〉

- (1) この総数には外国籍の日本語指導が必要な生徒と共に、日本国籍で日本語指導が必要な生徒の両方がまとめられた数となっている。
- (2) 在県枠とは高校入試において一般受験とは別に「特別枠入試」を実施し、ある一定の数の入学枠を外国籍の生徒のために用意するアフーマティブ・アクションである。神奈川県では主に「在県枠」と呼ばれており、大阪府では「特別枠」という名称で呼ばれている（石川他 2020）。
- (3) チェンさんはまだ高校 1 年生ということで、大学や専門学校といった具体的な希望はまだ持っておらず、大まかな希望として進学したいという思いを持っていた。

〈引用文献〉

- 濱沖敢太郎, 2020, 「勤労青少年教育における学校方式の問題－教育機会拡充をめぐる社会的力学」木村元編『境界線の学校史－戦後日本の学校化社会の周縁と周辺』東京大学出版, pp.81-110.
- 樋口直人・稲葉奈々子, 2018, 「間隙を縫う－ニューカマー第二世代の大学進学－」『社会学評論』68 (4), pp.567-583.
- 広崎純子, 2007, 「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択－支援活動の取り組みを通じての変容過程－」『教育社会研究』第 80 集, pp.227-245.
- 今井貴代子・大坪義男, 2008, 「春日丘高校定時制課程－一人ひとりの「学校に通う意義」をささえる」志水宏吉編『高校を生きるニューカマー－大阪府立高校にみる教育支援』明石書店, pp.305-319.
- 伊藤莉央・王・林貴哉・山本晃輔, 2019, 「外国人生徒を「特別扱いする学校文化」の形成に関する考察－大阪府立特別枠校の事例から」『未来共生学』第 6 号, pp.299-327.
- 石川朝子・榎井緑・比嘉康則・山本晃輔, 2020, 「外国人生徒の進学システムに関する比較研究－神奈川県と大阪府の特別枠校の分析から」『未来共創』第 7 号, pp.193-220.
- 香川めい・児玉英靖・相澤真一, 2010, 『〈高卒当然社会〉の戦後史』新曜社。

- 鍛冶直紀, 2018, 「夜間定時制高校の学校文化－1970 年のある学校の事例から－」『日本学習社会年報』第 14 号, pp.64-75.
- 神奈川県教育委員会・認定 NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ・公益財団法人かながわ国際交流財団, 2021, 『神奈川県の日本語指導が必要な高校生の進路と校内の支援にかかわる調査』。
- 城所章子・酒井朗, 2006, 「夜間定時生高校生の自己の再定義過程に関する質的研究－「編成資源」を手がかりに－」『教育社会学研究』第 78 集, pp.213-233.
- 古賀正義, 2017, 「定時制高校における中退問題の実証的分析－補償と排除の間で－」『教育学論集』第 59 号, pp.1-30.
- 児島明, 2010, 「ニューカマー青年の移行に関する研究－在日ブラジル人青年の「自立」をめぐる物語を手がかりに－」『地域学論集』第 6 巻第 3 号, pp.283-297.
- 黒田協子, 2021, 「外国につながる生徒の「意識化」を目指した課題提起型教育－定時制高校でのアクションリサーチをもとに－」『上智大学教育学論集』第 55 号, pp.77-91.
- 文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課, 2018, 『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況に関する調査（平成 30 年度）の結果について』。
- 宮島喬, 2019, 「移民二世代の就学にみる社会的統合と排除-彼らの高校進学をめぐって」『大原社会問題研究雑誌』No.728, pp.67-82.
- 野部勝也, 2020, 「定時制高校における「外国につながる生徒」への支援体制づくりについて－多文化支援情報交換会による教師の意識への影響に着目して－」『教育デザイン研究』第 11 号, p.326.
- 太田晴雄, 2000, 『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院。
- 佐川宏迪, 2022, 『定時制高校の教育社会学－教育システムの境界と包摂－』勁草書房。
- 志水宏吉編, 2008, 『高校を生きるニューカマー－大阪府立高校にみる教育支援』明石書店。
- 志水宏吉, 2000, 「裏側のニッポン－日系南米人の出稼ぎと学校教育－」『教育社会学研究』第 66 集, pp.21-39.
- 清水睦美, 2006, 『ニューカマーの子どもたち－学校と家族の間の日常世界－』勁草書房。
- 高松美紀, 2013, 「日本語指導が必要な外国人生徒を対象とした「取り出し指導」をめぐる同僚性と専門性－定時制高校の非常勤講師に焦点を当てて－」『多言語多文化－実践と研究』第 5 号, pp.72-98.
- 田巻松雄, 2020, 「栃木県における外国人生徒の進路状況－10 回目の調査結果報告－」『宇都宮大学国際学部研究論集』第 50 号, pp.63-70.